

2019年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

【学校像】

「豊かな人間性を育み、社会に貢献できる青年を育成する」という建学の精神をもとに21世紀を生きる子どもたちが知的社会で必要とされる「複雑な問題に対する解決能力」「クリティカルシンキング」「創造性」などの人工知能にはできない人間味のあるスキルを身につけるための教育を推進する。そのために、授業の形態ではなく「今何をしなければいけないのか」「どういう行動をとるべきなのか」を考えて学ぶアクティブラーニングを推奨する。しかし、その根底として我が国の教育を支えてきた「座力の育成」を教育の「不易」なものとして捉え、アクティブラーニングと対局をなすパッシブラーニングに対しても否定するのではなく、「流行」に流されることなく「座学」を確立し時代の変化に対応できる生徒を育成する。附属中学校においては「基本的生活習慣」の育成と定着(座力の育成)が将来の高校生活の基盤を形成するものと捉えて教育活動のあらゆる機会をとらえて育成を図っていく。

また、「国際化」していく時代に世界で活躍する人材の育成を念頭に専門学科の「国際科」を設置するとともにネイティブ教員を採用することで「英語教育」「国際理解教育」を推進していく。

【生徒像】

「気づく心」「考える力」「チャレンジ精神」を教育の3本柱とし、すべての教育活動を通して、次のような生徒を育成する。

- 社会的規律を尊重し、豊かな情操を身につけた品位ある生徒
- お互いの人権を尊重し、学校や地域社会の中で協力・共同できる生徒
- 自主的、自律的な学習態度で学力の向上をめざし、異文化に触れることによって、21世紀を担う若者にふさわしい国際的な視野を持った生徒
- ※ 真の国際人は自国の文化に深い知識を持つとともに、自らのアイデンティティーを見失わない視点で教育活動を推進する。

2 中期的目標

高校・附属中学共に各部・各学年で「基本的生活習慣の確立」と附属中生にとっては学芸高校への進学、そして高校へ進学をしてクラスを中心としてリーダーシップを発揮できる生徒となることを目標としている。高校生には、保護者が獲得してほしい資質の1位である「学力・知力」は勿論のこと、上位にきている「自主自律の姿勢」「協調性・社会性」「責任感」(高校保護者アンケート結果)を獲得することを教育の柱と据え、結果として4年制大学進学実績の向上(保護者アンケートによる希望が1位4年制私立大学文系、2位4年制私立大学理系)という重点目標達成を目指して具体的な行動計画を立てる。

※ 外部評価機関の「授業評価、クラス経営評価、保護者からの評価アンケート」を実施・分析し数値を示して改善を図っていく。この数値は「プラス評価」－「マイナス評価」であらわされる「指数」となっている。

例えば、60指数は80%のプラス評価－20%のマイナス評価のことを指す。したがって「60指数以上」A、「59～20指数以上」B、「19～20指数以下」C、「19以下」Dと考えて評価・分析する。指数と書いていない数値については%の割合表記。

※ 校務分掌については高校と附属中学校は同一の組織として運営していく。

1 生徒指導を根幹に据えた学習指導と生徒のニーズに応えられる進路指導を推進する。

(1) 基本的生活習慣の確立

学力向上の基盤は「基本的な生活習慣(座力)の確立」なくしてあり得ないという教育信念から昨年度に引き続き「気づく心の育成」「チャレンジ精神」「思考力の育成」に努め、自己管理能力(自制心)を高める。また、生徒を指導する教職員の資質を向上させるために機会あるごとに啓発を行って行く。特に附属中学校生徒については中学3年間で基本的生活習慣を確立させることが高校進学後の進路実現につながることを意識して指導していく。

ア、社会人としては許されない「遅刻」の防止に自ら努める「自己管理能力を育成」し時間を守ることの大切さを自覚させる。(自己管理)

イ、いじめを許さない学級、学年、学校「文化」を作り出し、生徒全員が安心して登校し学習できる学級・学校を目指す。(他者理解)

ウ、社会人として巣立つにふさわしい「服装・マナー」の向上に努め保護者から信頼される教育環境を作り出す。(教養育成)

エ、SNSやメールの使用上のマナーを含め、相手の立場を踏まえた適切なコミュニケーションが図れるように指導する。(人権育成)

特に全員一人一台のタブレット(iPad)またはパソコン(DDコースはサーフェスゴー)を持たせているのでその正しい使い方を指導していく。

オ、教育裁判の事例を職員会議等で示して教職員の危機管理能力を高めるとともに「危機管理マニュアル」の作成を目指す。(危機管理)

(2) 学力向上と進路実現

学力向上の基盤は、生徒の「自己管理能力の確立なくしてあり得ない」という教育信念から教科学習、講習等様々な教育活動を通して時間の使い方を学ばせるため「学芸手帳」(バーチャルタイプ)の利用を促進し生活習慣を見直し時間の使い方の工夫から短期・中期・長期と計画的に学習活動(クラブ活動も含む)をする習慣を定着させる。

※ 生徒は「iPad」を所持しているが、アナログの「学芸手帳」に書き込みことにより一層自分のスケジュールの管理や目標に向かっての進捗管理・やるべきことを確認するTo Do Listを意識しやすくしている。

この「自己管理能力」を高める中で保護者・生徒の願いである「自主自律の姿勢」「4年制大学進学」、附属中学校生徒にとっては「学力向上」「生活指導・社会力向上」という目標を実現できるように進路ガイダンスを行い、希望進路の発見・実現に寄与するため教育課程を編成(選択授業での対応や多様な講習の実施)するとともに「電子黒板(70インチの黒板上を左右に移動できる液晶型)」「i-pad(一人一台)」「スタディ・サプリ」「スタディ・サプリ・イングリッシュ」「駿台サテネット」を利用した授業・講習を通して自学自習を推進し授業改善にもつなげていく。附属中学校生徒については、授業での利用だけでなくタブレット端末を利用した「職業調べ」「国際理解教育」(総合的な学習)を通してキャリア教育を進め将来展望に立った学習意欲の喚起を図っていく。

また、大学入試改革に備えて特に本校が力を入れている国際理解教育の推進のために英語4技能の育成を図るために分掌組織に「英語教育研究会」を立ち上げ、教育大の教授を招き研修に努める。また、1年留学制度の整備充実を図り、子どもたちのニーズに応えるとともに留学にはまだ抵抗感があるが英語をより広く深く学びたいという生徒のニーズに応えるコース等を考えて行く。

4年目となる看護コースについては、4年生大学進学をするメリットが徐々に周知できてきている。生徒・保護者のニーズに応えられるよう大学進学実績を向上させていく。

附属中学校は「学習とクラブ活動」の両立をめざしながらも特に「英語教育」については重点を置き、中学校卒業段階で全員英検3級を目指す。

以上のように進路指導の基盤となる教員の授業力を高めていくため「生徒の授業アンケート」(年2回)と教職員間の相互授業参観等を実施し、授業内容の点検や教授法の改善の視点を知らせ。今年度も7月の調査で改善すべき点を示された多くの先生が2学期に改善を図り、7月より高い評価を得ていることが分かる。

ア、教育のデジタル化に対応し「電子黒板」「i-pad」「スタディ・サプリ」「スタディ・サプリ・イングリッシュ」「駿台サテネット」等の利用促進を行い授業改善に努める。

イ、グローバル化に対応した教育活動を展開するため英語教育の改善と国際理解教育の推進をさらに図っていく。

ウ、教員に対する生徒の授業アンケートを実施し「自己の授業の振り返り」を行わせ授業方法の自己点検を行うとともに授業力向上のための相互授業参観を行い「授業に対する信頼度」「学習効果への実感度」等を伸ばし生徒の満足度を高める。

エ、自ら課題を見つけ能動的に学ぶ習慣作りの一環として漢検・英検・数検などの資格試験受験の機会を増やす。

大学入試改革最初の受験者となることを意識し外部試験の導入についても検討する。

オ、生徒の多様なニーズに応えるために教育課程の編成、多様な講習の機会を設定し進路指導を充実させる。

(3) 社会に貢献できる資質の育成

「少子高齢化社会」「国際化」「外国人労働力の流入」「AIの進化」などの社会情勢の中、生徒たちは、自立・自律の精神とともに社会の中で自己を活かす精神と実力をもった大人として成長していかなければならない。生きていく社会の中で「自分は何ができるのか」「どう行動するのか」を考える視点を持たなければならない。本校がすべてのコースでクラブ活動を認めているのも教科の学習だけではなく、学校行事やクラブ活動、ボランティア活動等を通してこれらの資質向上を図れると考えているからである。

特に子どもたちの生活の基盤となる「クラス」において互いに助け合う精神の確立が大切だという認識のもとに教育活動を行っていく。

ア、ボランティア活動(大阪マラソンへのボランティア参加等)やセレッソとのサポーターティングマッチ、エコ活動、地域清掃活動を通して社会への関心を高めるとともに奉仕の精神を育成する。

イ、クラブ活動を活性化させ、勝利をめざし努力する過程で持続力や耐性を養い、仲間と協力しあう姿勢(協調性)を育成する。

ウ、体育大会や文化祭等の行事を通して他者への思いやりや自分の意見を分かるように相手に伝える力(コミュニケーション能力)、調整力を育成する。

エ、日々の授業に対する姿勢こそが「集中力を養う最適の手段」であり、学習とクラブ活動・奉仕活動・学校行事への取組等を両立する中でこそ「生活体験に基づいた生きた知識(智慧)を育成できる」という観点で教育活動を進める。

2 保護者に信頼される学校づくり

(1) 保護者への情報提供

「校区という地域」を持たない私立高校・附属中学は、保護者との連携をいかに図っていくかが大きな課題といえる。子どもが勉強や各種行事で活動する姿が見えるように情報発信の質を高めていくことが大切だと考える。その基盤となるのは子どもたちが担任をはじめ教職員を信頼し、学校生活を充実して過ごしている姿を家に帰ってきた子どもから保護者が感じることができるようにならなければならない。また、「進学校」として進路指導を充実していくことも欠かせない。成績懇談や保護者集会を充実し、生徒や保護者が知りたい情報発信となるように情報の質を高めていく。

このために年2回、保護者対象のアンケートを行い、本校の教育活動の振り返りと改善点を明確にする。

ア、保護者の学校への信頼度(生徒・保護者へのきめ細かな対応と学校生活の充実)を高めていく。

イ、学校からの情報発信力を高め、ホームページの閲覧者数を向上させ、開かれた学校づくりを通して保護者との信頼関係を深める。

ウ、成績懇談や進路ガイダンスを充実し保護者・生徒に質の高い豊富な情報を発信し幅広い選択肢の中から進路を決めていくことのできる環境づくりに努めていく。

(2) 危機管理体制の確立

異常気象の表れと思われる局地的豪雨・巨大台風の上陸をはじめ、いつ来るかも知れない地震への対応を考え、生徒の安全を第一にした防災体制を地域社会とも連携し構築していくことが求められている。特に大和川の水位上昇で帰宅困難となった場合の対応を関係機関と連携し構築していく。

ア、避難訓練(火災時の避難経路と地震時の避難経路の区別)を通して集団で避難するときの心得を育成し、災害に備える。

イ、学校として帰宅難民となる生徒が出た時を想定した避難物資等の準備体制や保護者との連絡体制を整える。

また、日々の教育活動の中で「危険予見義務」と「危険回避義務」を教職員の使命と認識し、事故防止にも努める。万一の災害・事故に備えた保険についての知識を高め教職員賠償保険や第三者賠償保険等にも加入して教職員・生徒の保障に努める。

【自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

〈自己診断の結果と分析〉

1 基本的生活習慣の確立

保護者アンケート「生活指導は充実していて規範意識と自律性の育成に十分な効果をあげているか」という質問は附属中学校では77%の高い支持を受けている。高校でも72%の肯定回答となっている。この数字と比例して「この学校に入学させて良かった」という肯定回答が附属中で77%、高校でも74%の指示となって現れている。保護者が本校の教育に期待している項目に「自主自律の姿勢の育成」(学力向上について附属で第2位、高校で第2位)が入っているのと一致している。また、「本校の特色は何か」と言う質問で「子どもたちがいきいきと学習や部活に取り組んでいる」「クラブ活動と学習の両立」への評価が高い。

高校・附属ともに第1位、第2位となっていることから保護者の大半が子どもの学力向上・進路保障だけでなく本校の教育目標の「社会に貢献できる青年の育成」に賛同していることが分かる。

この目標達成のために「遅刻」「服装」等のルールの遵守を指導目標とし

【学校協議会からの意見】

1 基本的生活習慣の確立

○ 生徒の1日は、大きく「学校生活」と「家庭生活」の二つに分かれますが、両方の生活を充実させるためにも、「基本的生活習慣の確立」は大変重要なことだと思います。

○ 昨今、SNSに代表される「対面」を必要としないコミュニケーション手段(=「オンライン」)が増えています。こうした新しいコミュニケーション手段は、「規則正しい生活を送る」、「服装・身だしなみに気を配る」、「挨拶をする(礼儀をわきまえる)」、「遅刻をしない」などといった「基本的生活習慣」を多少疎かにしても、(コミュニケーション自体を)成立させることが可能です。しかし「基本的生活習慣」を欠いたコミュニケーションは、ともすれば表面的・一方的になりがちです。そのことが原因となって、人間関係の誤解を招いてしまうこともあります。生徒達は「オンライン」の利便性を享受しながらも、「基本的生活習慣」を始めとする、社会生活の基盤となる「ルール」や「道徳」を大切にして欲しいと思います。

てきたが、目標数値には達していませんでした。今後も遅刻指導については、高校生ともなれば自分で時間管理が出来なければならず、親に頼ってはいだめだということを機会あるごとに該当生徒やクラス指導で訴え、「遅刻は他人の時間を奪う行為」と言う意識の定着を図っていく。また、附属中学校の生徒には「遅刻をしない」ではなく、「遅刻をしないためには何時に最寄りの駅に着いたら良いのか」「何時に家を出たら良いのか」というように具体的な生活計画を立てさせる。

いじめ行為は、保護者アンケート「いじめがなく安心して登校できる」との回答が附属中では79%、高校87%と高い数値となっている。油断することなく早期発見を目指して5月と11月にアンケート調査・教育相談を行い、クラブにおいても練習終了後、着替えた後のミーティングで生徒の様子を観察するように教職員を指導していく。さらに、生活指導の事例を職員朝礼時に話し、日々注意喚起を教職員にすることで教員の生活指導力の向上にも努めてきた。

特に今の子どもたちは大人が想像する以上のストレスをためており、小さいいじめが引き金となって自死するに至ることを考え猫どもの言動に注意を払うように啓発していく。

一方、学校現場を悩ませている SNS については、次年度より i-pad を利用した教育活動が実施されることもあり、「ソーシャル・メディア・ポリシーの確立」に向けて今年度も方針を明確にして取り組んできた。その結果、昨年度に比べ SNS の書き込みによる処分者は大幅に減少した。

2 学力向上と進路実現

開校2年目となる附属中の基本方針は「学習とクラブ活動の両立」である。「子どものやる気を引き出し、学習活動に前向きに取り組んでいる」という評価についても附属中は60指数を超えている。高校では保護者アンケート「どのような進路の実現を望んでいるか」の回答の78%が「4年制私立大学」（文系55、理系28）となっている。また「進路指導が充実していて生徒の進路指導の発見・実現に十分寄与している」という回答指数が67%の肯定回答となっている。次年度は80を超える方策を進路指導部を中心に考えさせていきたい。学力向上は、日々の授業がこの鍵となる。学力向上に大きく寄与する「先生の好感度」については、改善すべき点が明確に示されていたため後半の調査では大幅にアップした。しかし、学力向上実感（この授業を受けて学力があがったと実感できるか）については、改善点が示されているにも関わらず、自己改善が出来ず、マイナス評価となっている教職員がおり、全体の評価を下げている。

ハード面では、すべての教室に電子黒板が設置され、新1年生から高校も附属中もタブレットを持つようにした。それらを使用して活用できるようにスタディ・サプリ、英語サプリを導入し、自学自習を促し学力向上を図っているが、まだ十分な使用頻度とはなっていない。

また、進路指導については、十分な力がありながら、3学期の一般入試まで待つことができず、安易に推薦入試を受けて早く進路を決めてしまうという傾向が生徒にも保護者にもあり、関関同立等の進学実績をより多く伸ばすことができなかった。次年度は、これからの大学入試改革も踏まえて進路指導部より一般受験で本当に行きたい大学に行くように指導を繰り返していく。このため、「入試情報などの進学指導に必要な情報は、生徒のみならず保護者にも十分提供されている」と言う保護者アンケートの肯定回答を65%からさらに伸ばしていく必要がある。

3 社会に貢献できる資質の育成

本校は、すべてのコースで「勉強とクラブ活動の両立」を奨励している。これはクラブ活動を通して先輩と後輩の在り方、未熟な生徒にどのように教えれば向上するのか、そのためには自分はどういう背中を後輩に見せればよいのか等を経験する中で真の奉仕の精神が生まれるものと確信しているからである。今年も昨年度に引き続き、大阪マラソンへのボランティア協力にも多くの生徒が参加した。子どもたちの心に「奉仕の精神」を醸成できたと考えている。クラブ活動についても作法室（和室）を造り、高校・附属中学校生徒のために書道・茶道・競技カルタ部を発足しスポーツに偏りがちなクラブの活性化も図ることが出来た。行事についてはスポーツ大会、文化祭とともに学年縦割りで行う体育大会を通して学年を超えた一体

○ 「挨拶」はコミュニケーションの基本です。その点、大阪学芸の生徒は、挨拶がよく出来ていると思います。学校を訪れる者にとって、廊下や階段で出会った生徒達の方から「こんにちは」と挨拶を戴くことは、大変すがすがしく良い気分になります。「挨拶の習慣」は大阪学芸の良き校風として、これからも励行して欲しいと思います。

○ 新聞やテレビの報道によると、最近の中学生や高校生の中には、SNSやオンラインゲームに長時間没頭し、そのために食事や睡眠時間が乱れ、勉強時間も不足する、学校も欠席・遅刻がちになる等の状態に陥っている生徒が全国的に増えているようです。大阪学芸にはそういう状況の生徒はどのぐらい居るのでしょうか。「家庭生活」の乱れは「学校生活」に悪影響をもたらします。「オンライン」時代だからこそ、「基本的生活習慣」を正しく確立し、生徒達には、心身ともに健康な「学校生活」・「家庭生活」を送って戴きたいと願います。

○ 「中期目標」に書かれている「自己管理能力の育成」や「相手の立場を踏まえた適切なコミュニケーションを図ること」は、「ネット時代」に生きる現在の生徒達にとって、以前にも増して求められる要素です。先生方には家庭との連携を一層大切にしながら、「基本的生活習慣の確立」に向けた指導をよろしく願います。

2 学力向上と進路実現

○ 「中期目標」にも書かれているとおり、「学力向上」は生徒の「自己管理能力の確立」なくしてあり得ません。学習は受け身ではなく、目標や高い意識を持って主体的、自律的に行うものです。大阪学芸は「自学自習型」の学習による学力向上と、進路実現に向けた環境が整備されています。管理自習室やサテネット教室の利用は、同じ目標を持った仲間と机を並べて切磋琢磨することで、学習意欲を持続することができます。そして生徒全員が持つタブレット（IPAD）は、さまざまな学習ツールやソフトを活用することで、自宅でも効率良く調べ学習を行ったり、疑問点をすぐにオンラインで先生に尋ねたりすることが出来ます。授業の充実は申し上げるまでもありませんが、私学ならではのこうした学習環境整備を、今後一層充実させて戴きたいと思います。

○ ICT教育を推進する（→デジタル化）一方で、敢えてアナログな「学芸手帳」を全生徒に配布し、スケジュール管理や目標に向かっての進捗管理を促していることは大変良い試みです。「学芸手帳」のようなアナログ・ツールの長所は、全体を俯瞰的に見ることが出来る点だと思います。長期的な目標設定がし易く、「To Do List」を意識したページ作りが為されている「学芸手帳」を上手く活用すれば、生徒の自己管理能力は格段に高まると思います。

○ 2020年度から実施の「大学入試改革」の要諦として、文科省指針では「知識基盤社会における新たな価値を創造していく力を育てることが必要であり、社会で自立的に活動していくために必要な『学力の3要素（※）』をバランスよく育むことが必要」と謳っています（※1、知識・技能の確実な習得 2、思考力、判断力、表現力 3、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）。つまり大学入試は、将来の社会的自立を見据えた進路実現の「入り口」とも言えるのではないのでしょうか。日頃の学習指導、進路指導においても、習得した知識・技能を基盤にして、将来、どのように社会的自立を図って行くのかを生徒自身が意識し、考える機会を多く設けることで、生徒の主体的な進路実現に向けて援助して戴きたいと思います。

○ 学校の「自己評価」では、ハード面（電子黒板、タブレット等）は整備されているものの、「まだ十分な使用頻度とはなっていない」と分析されています。その理由として「デジタル教材が遅れていることも大きな要因」と書かれています。また今年度の重点目標に「教育のデジタル化」、「電子黒板とタブレット利用の促進」とありますが、ICT教育の授業への取り入れ、実践の度合いは、教科や教員によって差があるのでしょうか。生徒が「自学自習」を進めるためのソフトである、「スタディサプリ」の初期設定ログイン数は100%と、目標を達成していますが、一方で教科ごと或いは教員ごとのICT実践の度合いを測る指標はあるのでしょうか。現代の生徒達のICT環境に対する習熟度（≒ICTリテラシー）は、一般的には高いと思いますが、教員の側のそれは、年齢・世代的な要因もあって、個々の教員によって習熟度・理解度にバラつきがあるかもしれません。学校全体のICT教育力の底上げを図るため、例えば、若手の先生が得意とするICTを活用した取り組みと、ベテランの先生が持つ経験や授業

感を創っていくことができた。

4 保護者への情報提供

保護者アンケート「学校のホームページは充実していて必要な情報を得ることができる」の回答は高校では70%、附属中学では79%の肯定回答が得られた。また、保護者から見て「担任は相談しやすく、親切に対応してくれる」という安家へと附属中では90%、高校でも83%の肯定回答を得ている。私学は、地域という「校区」を持たないため、学校から保護者への情報発信のあり方が保護者との信頼関係を築く上で非常に重要なものとなる。これらが「知り合いや親せきにこの学校を進めたい」という肯定回答を附属中で77%、高校で74%の数値となって現れている。

また「授業参観や懇談会は適切な頻度で行われており、学校の様子をうかがい知る機械として機能している」という保護者アンケートの肯定回答が附属中では79%、高校で74%となっている。以上から保護者との連携はまだ課題はあるとしても順調に推移していると考えている。

5 危機管理体制の確立

本校は大和川以南からの通学者が多く、豪雨による氾濫・通行止めにより帰宅困難となる生徒が3分の1を超える。このため、昨年度に引き続き4月より各自に教室保管用の避難物資を購入し、その対応を図ることが出来た。この取り組みは今後も進めていきたい。

のノウハウ等を上手く融合・共有するような仕組みがありましたら、是非ご紹介戴けたらと思います。

○ 高等学校のアンケートの「現在の学校生活について」のうち、「進学講習が学力の向上につながった」の項目が指数「-20」・「C」という評価は残念です。大阪学芸は塾に通わなくても大学受験に対応できる学校だと思いますので、この項目の指数が厳しいという結果に対しては、「自己評価」にも書かれているような改革が必要だと感じます。

○ その他の「現在の学校生活について」のアンケート項目も見ると、学習関連の質問項目が軒並み「C」評価であるのが気になります。そして1年生は「通常の評価」が多いが、2年生になると指数が一気に厳しくなる傾向が見てとれます。学習関連以外の「いじめなどは少ない」、「クラブ活動は活発である」、「クラスにまとまりがある」といった項目の評価は、1～3年生を通して指数が安定していますので、概評としては「学校生活は人間関係面はうまく行っているが、学習面ではあまり満足出来ない」と言えるのではないのでしょうか。ただ、一般的に言いますと「勉強はしんどいこと」です。高校の学習は量も増え、内容も難しくなります。特に高校生活の折り返しにあたる高2は、学習面で壁にぶつかり、生活面でも中だるみが出易い時期だと思います。1年生と2年生の指数の差異は、そうした要素にも起因しているように感じます。しかし、「しんどいこと」、「難しいこと」を乗り越えるのは、あくまで生徒自身です。上記の質問は、学校や教員が生徒に対して「やる気を出させてくれる」か否か、「興味を持てる授業」を行なっているか否かの質問のため、学校や教員に改善を促すことは当然ですが、それと同時に、「・・・やらされる講習ではなく自ら考えて自学をする」(※アンケート・「自己評価」)と書かれているとおり、生徒に対しても、「自立・自律」を促していると言えなくもありません。

○ 一方、附属中学校は「現在の学校生活について」のアンケート項目は「A」または「B」評価が殆どであり、学年ごとの評価も概ね安定しています。義務教育の中学生が、地域の公立中学校ではなく敢えて私学の本校に入学したということは、附属中学校に対する期待が非常に高いという意味に他ならない訳ですから、入学後もその期待を裏切らない教育を行なっていることが、これらのアンケート項目によって裏付けられていると思います。開校5年目の附属中学校は、まだまだ「若い学校」です。今後とも、より良い学校づくりに邁進して戴きたいと思います。

3 社会に貢献できる資質の育成

○ 中期目標にも書かれていますが、生徒は「自立・自律の精神」とともに社会の中で自己を活かす精神と実力をもった大人として成長」することが求められます。「自立・自律の精神」涵養の第一歩は「自ら考えること」だと思います。「考える力」は、「社会に貢献できる資質」に必要な「判断力」、「実行力」の源泉になります。「考える力=思考力」を伸ばすために良いのが「読書」ですが、現代の若者の「読書離れ」は深刻だと言われています。大阪学芸の生徒は日頃、どのくらい本を読んでいるのでしょうか。「読書時間/冊数」に関するアンケートがあれば良いかと思います。

○ 将来、社会人として仕事に就いた際は、自分の考えを論理的に説明し、周囲に理解させる力が求められます。中期目標にも書かれている「国際化」・「外国人労働力の流入」が常態になっている現代社会においては、以前にも増して「自分の考えを正しく相手に伝える力」が必要となりますが、現在のSNS/オンライン文化のもとでは、コミュニケーションの速達性や利便性の側面が強調され、内容をじっくり吟味し咀嚼するという点があまり重視されていない気がします。その結果、どちらかというと安易・簡便な言葉づかいや、起承転結、5W・1H(いつ・どこで・だれが・なにを・なぜ・どのような)を欠いた文章の多用によって、正確に意図が伝わらなかつたり、誤解・トラブルの原因になったりするケースが増えていると感じます。「考える力=思考力」を伸ばすためにも、学校として生徒の読書の習慣づけを図って戴けたらと思います。

○ 余談になりますが、授業においても読書に対する興味・関心を喚起するような取り組み工夫があれば面白いと思います。例えば「英文解釈」の授業で、ルーシー・モンゴメリの「赤毛のアン」や、アガサ・クリスティの「エルキュール・ポワロ」シリーズ作品の文章の一節を取り上げる。これらの有名小説は、過去、何人もの翻訳者によって邦訳されていますが、原文の同じ箇所が翻訳者によって、どのような日本語の文章に訳されているのかを比較するのも面白い

と思います。その比較を通じて、訳語としての日本語の選択、英語と日本語の文章構造の違いなどが浮き彫りになります。原作の時代背景、地誌なども交えて解説すれば、生徒の知的好奇心をさらに刺激するのではないのでしょうか。

○ 年に3回発行される「学芸新聞」を読むのを楽しみにしています。「学校行事の紹介」、「在校生のクラブ活動での活躍」、「卒業生へのインタビュー」等、盛りだくさんの記事が掲載されています。数年前の「学芸新聞」に、「東海道新幹線の運転士」として勤務する大阪学芸高校の卒業生（中島庸介氏）のインタビューが掲載されていました。インタビュー記事には、「・・・幼いころから電車が好きでした。そして年を重ねるごとに、電車の運転士として仕事に就きたい・・・」と書かれていました。記事からは、多くの人命を預かる仕事に対する「緊張感」と「やりがい」がひしひしと伝わってきましたが、見落としではないのは、新幹線運転士になるまでの経験です。卒業生の中島氏は入社後、まず3年半、新大阪駅での切符販売、改札口の案内、ホーム上の安全確認等の駅業務を経て、その後、さらに約3年間の新幹線車掌業務をこなした後、新幹線の運転士試験（国家資格）の受験資格を得て見事合格したということです。多くの仕事がそうですが、社会に出て、いきなり自分がやりたい業務に就ける機会は、そう多くはありません。さまざまな経験を積むことで自己の「能力の引き出し」を増やして行き、次第に目指す目標へ近づくことが出来るのではないのでしょうか。生徒達には、「社会に貢献できる資質」を磨く為にも、附属中学・高校生活の中で、出来るだけ色々な体験をして欲しいと願います。

○ 中期目標には、「社会に貢献できる資質」向上を図る取り組みとして、教科学習以外に学校行事、クラブ活動、ボランティア活動等が挙げられています。大阪学芸は附属中学校も高等学校も、勉強とクラブ活動の両立を図ることを推奨しています。これは大変良いことだと思います。クラブ活動は、同じ目標を持つ仲間との「共助意識」、厳しい練習に耐え地道な努力を続ける「忍耐力・継続力」、上級生になり下級生の指導やクラブ運営に率先して当たる「リーダーシップの意識」、勉強や家庭生活とクラブ活動のバランスを図る「自己管理の能力」など、将来、社会に出た際に必要とされる資質を磨くことが出来ます。ボランティア活動に力を入れているのも、大変良いことだと思います。自分のことしか考えない「利己主義」ではなく、他者や周囲に対する思いやり、奉仕の精神等を育む素晴らしい取り組みだと評価します。

4 保護者への情報提供

○ 保護者アンケートの「大阪学芸のホームページは充実していて必要な情報を得ることができる」の肯定回答が74%、同じく「担任は相談しやすく、親切に対応してくれる」の肯定回答が87%という高い数値結果については、大変良いことだと評価します。オンラインでの情報提供に留まらず、先に挙げた「学芸新聞」のような、カラー刷りで見易い、紙の情報媒体を提供しているのも好感が持てます。

○ 「さくら連絡網」は速報性が高く、状況変化等についても随時配信して戴けるので、大変良いツールだと評価します。

○ さまざまな地域、遠方からの通学者も多い私学の場合、保護者に対する情報提供のあり方は、在校生に続く生徒の募集にも繋がる、大変重要な要素だと思います。ホームページのさらなる改善や、保護者を対象にした各種の催しを一層充実させて戴けたらと思います。

5 危機管理体制の確立

○ ここ数年、自然災害の頻度、規模が拡大しています。3年前の大阪府北部地震の発生時、校内には数百名の生徒が居たと聞いています。鉄道再開・安全確認後に生徒達を帰宅させるため、急遽、大型バスを複数台手配して通学地域・方面ごとに乗車させ、同じ方面から通勤される教職員の方も同乗して、最寄り駅まで送り届ける措置を取られたとのこと。保護者にとっては大変心強い対応であったと評価できます。

○ 上記のような事態は、今後も起こり得ます。自然災害については、生徒がすでに学校内に居る場合と、通学途上の時間帯の場合とでは、当然学校の対応も変わってくることでしょう。保護者からすると、生徒は家を出たが、学校に到着していない時間帯に起こる災害は、学校の管理下でない状況にあり、安否・動静の確認に手間取るなどして不安が高まると思います。非常災害時は携帯電話も繋がりにくいケースがよくあるので、「ライン」や「さくら連絡網」等をうまく活用することで、生徒・教職員ともに、状況に合わせた臨機応変な対応

	<p>が取れるようにして戴けたらと思います。</p> <p>○ 全般的には「中期目標」に書かれているとおり、「避難訓練」、「避難物資等の準備態勢」、「保護者との連絡体制」を整えるとともに、自然災害に留まらず、生徒の生命・安全に関わる危機・危険については、日々の教育活動の中で「危険予見義務」と「危険回避義務」を教職員の使命として認識して戴き、事故防止にも努めて戴くようにお願いします。</p>
--	--

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 基本的な生活習慣の確立	<p>1 規律ある学校生活の確立</p> <p>(1) 規範意識と自立性の育成</p> <p>(2) 学級集団の育成</p> <p>(3) 教職員の学級経営・生徒対応能力の向上</p> <p>以上の三項目を達成する中で学習環境を整え学力向上をめざす。</p> <p>附属中学校の設立趣旨は子どもたちに「落ち着いた学習環境」を保障することにある。この教育目標実現のための教育活動を展開する。</p>	<p>私学の最大の教育目標は生徒の「学力保障」にある。その基盤となる「落ち着いた学習環境」と言える。</p> <p>クラス・学年の秩序は真面目な生徒たちによって支えられているという認識のもとに校則をきっちりとし、気づく心を持って困っている人たちに声を掛けることのできる生徒を育成する。</p> <p>(1) 遅刻防止週間・服装違反撲滅週間等を定期的に実施し、生徒の規範意識向上を図る。</p> <p>○指導カードの発行による啓発</p> <p>(2) 「いじめアンケート」を実施し、担任・学年主任・生活指導部・管理職による点検で共通認識を図りいじめを許さない学校づくりに専念する。</p> <p>○いじめ対策委員会の実施</p> <p>(3) 学級の係活動や清掃活動を協力して行う雰囲気を作り真面目な生徒が損をしない、担任に不信感を抱かない学級づくりを行う。</p> <p>また、生徒の人間関係を深めクラスと言う仲間育成の場で担任のきめ細やかなリードのもとに子どもたちの良さを引き出すことのできる担任力を育成する。</p>	<p>(1) 基本的な生活習慣確立のため各学年共に「一人あたりの遅刻回数」を1年2、2年3、3年5回、附属中1以内とする。</p> <p>(2) 学校生活全般を通じて「この学校には、いじめは少ない」という指数を60以上とする。</p> <p>(3) SNS への人権を侵害する書き込みについての指導を各学年2件以内に抑えることを目指す。</p> <p>(4) 学級経営において</p> <p>①「生徒の態度や行動が間違っているときはきちんと叱ってくれるし、感情的にならず生徒が理解できるように配慮してくれる」指数を50以上とする。</p> <p>②「生徒間のトラブルは少なくクラスメートを大切に作る風土がある」という指数を60以上とする。</p> <p>(5) 「いじめの少ない学校・学級となっている」という指数を以上とする。</p> <p>(6) 担任は「クラス生徒全員と話す機会を持つ」という指数を40以上とする。</p> <p>(7) 担任は「ホームルーム活動が充実して行えるように工夫してくれる」という指数を50以上とする。</p> <p>(8) 「クラス全体で取り組む活動を通して一体感が持てるように指導してくれる」という指数を45以上とする。</p>	<p>(1) 1年 2.77(昨年度 2.75)、2年 3.86(5.48)、3年 5.7(7.53)、附属中 1.1 という結果となった。昨年度よりも改善されたがも目標達成には届かなかった。「遅刻は時間泥棒」という視点から保護者との連携を密にして指導を継続していく。</p> <p>(2) 1年 39、2年 35、3年 55、附属中 38 と高い肯定指数となっていることから規範意識は向上してきている。</p> <p>より高い質の意識向上を図るためにボランティア活動等にも力を入れていきたい。</p> <p>(3) 子どもの生活に入り込んでいる SNS に伴うトラブルは学年が上がるごとに減少している。附属中でも指導例があるが一部の保護者の中で指導に理解を示さない者が出た。概ね2件以内に抑えることができた。</p> <p>(4) ①1年 48、2年 44、3年 49、附属中 63 で高校は60 指数には至っていない。一方、まったく叱っていないかと言うとそう感じている生徒は1 指数で生徒の心に入る指導までは至っていないことが分かる。②1年 80、2年 83、3年 90、附属中 41 と学年が上がるごとに指数もよくなってきている。</p> <p>(5) いじめのないクラスという評価では満足度指数が66、附属中 60 と高い数値を示している。また、良い友人に恵まれていると言う指数も56 という高水準となっている。教師側の気づきと情報交換を高め小さなことを放置せず、主任を中心に学級・学年経営を進めていく。</p> <p>いじめが少ないと感じている生徒も学年が上がるにつれて指数が高くなる良い傾向が見られる。</p> <p>(6) 1年 41、2年 40、3年 45、附属中 45 と高い数値を示している。</p> <p>(7) 1年 25、2年 25、3年 34、附属中 46 と高い数値を示している。</p> <p>(8) 1年 32、2年 35、3年 54、附属中 46 と高い数値を示している。</p>
	<p>2 学力向上と進路実現に向けた取り組み</p> <p>(1) 生徒による授業満足度の向上</p> <p>○ 授業アンケート・相互授業参観</p> <p>○ 教育のデジタル化</p> <p>電子黒板とタブレット利</p>	<p>附属中の設立趣旨は高校進学後につまづかない基礎学力の定着であり、高校は「4年制私立大学への進学」を望む保護者の願いに応えることと言える。このため教師の授業力向上は本校教育の根幹をなすと認識している。</p> <p>また、成熟した民主主義社会は</p>	<p>(1) 相互授業参観を実施する。</p> <p>授業アンケートを実施し次の項目のプラス指数を向上させる。</p> <p>(2) 教員の「好感度指数」を60以上とする。</p> <p>(3) 「先生の授業を受けるこ</p>	<p>(1) 教育は指導者の力によるところが大きい。このため、指導力のある教員が新任教員を指導する体制の確立が急がれる。「授業参観レポート」を作成し相互授業参観を昨年度に続き実施したが、普段の授業で互いにコミュニケーションをとって点検し合い高め合うまでには至っていない。また、教科会で指導案等の点検・意見交換等もはかられていない。</p> <p>(2) 教員の生徒からの好感度と学力は比例するもの</p>

<p>実現</p> <p>用の促進</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 英語教育の改善 <p>(2) 自学自習の態度を養成し意欲的に学習する姿勢を身に着ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ スタディ・サプリ・管理自習室の利用促進 ○ 英検・漢検等資格試験受験の促進 <p>(3) 希望進路の発見と実現に寄与する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 国際理解教育の促進 ○ 多様な講習の充実 	<p>「選択と自己責任」の社会と言える以上複雑化する大学入試の情報提供は欠かすことができない。</p> <p>授業力評価のアンケートを分析すると授業を受けて「学力向上実感」があると評価された先生は「好感度」においても高い数値をあげている。この保護者の信託に応えるために次のような取り組みを行う。</p> <p>(1) 授業力の向上をめざし、7月実施の1回目の授業評価で「何が評価を下げる原因となっているのか」「どの点を改善すればよいのか」を自己研鑽させる。また、相互授業参観(6月、11月)、ベテラン教師による若年教師の指導を充実させる。特に新任講師に対しては、授業参観・レポートを作成させ教科での指導を充実させる。</p> <p>また、主任を中心に担任・教科担任がクラスの授業の状態を把握し、問題がある場合はすぐに改善策を打つ体制を整備する。</p> <p>(2) デジタル教科書が急速に普及してくることに対応して全館整備が終了した電子黒板に加え、i-pad を利用し授業改善に取り組む。</p> <p>(3) 英語改革に対応し英語教育研究会を立ち上げ本校の英語教育について見直し改善を図る。</p> <p>(4) スタディ・サプリを導入し生徒の学習環境を整え自学自習を推進する。</p> <p>(5) 英検・漢検等の資格取得者を増やしていく。</p> <p>(6) 生徒のニーズの高い1年留学制度をさらに整備・充実する。</p>	<p>とにより学力や知識の向上を実感できる」という学力向上実感指数を60以上とする。</p> <p>(4) クラスにおいて「授業時間は集中して授業を受ける生徒が多い」という指数を60以上とする。</p> <p>(5) 高校では「さまざまな進路希望に対応手できるように教育課程は適切に整備されている」、附属では「全科目にわたり学習指導は充実しており、学力向上に十分な成果をあげている」という保護者アンケートの肯定的意見を60以上とする。</p> <p>(6) 「入試や進学に必要な情報が十分に提供されている」という指数を40以上とする。</p> <p>(7) 「進学講習が学力の伸長につながった」という指数を60以上とする。</p> <p>(7) 「全科目にわたり学習指導は充実しており学力向上に十分成果をあげている」という指数を60以上とする。</p> <p>(8) 電子黒板を利用した公開授業、タブレットを使用した授業研究を年2回実施する。</p> <p>(9) 英検準2級以上の資格保持者25%以上とする。</p> <p>(10) スタディ・サプリの初期設定ログイン95%を目指す。</p> <p>(12) 管理自習室の月利用者数を500、サテネット室利用者数を月350以上とする。</p> <p>(13) 英語教育改善の方策を打ち出す。</p> <p>また、1年留学制度の整備充実を図る。</p> <p>(14) 国際理解教育を充実する附属中の英語力を向上させる。</p>	<p>である。平均好感度は全国水準の66指数に対して本校は62指数となっている。附属中は全国が61なのに対して68指数と高い水準を保っている。</p> <p>(3) 学力向上実感は45指数(昨年度41)となっている。落ち込みのある教員が平均を下げている。指数的には問題はないがさらなる向上を図るために自己研鑽に努める姿勢が望まれる。</p> <p>(4) 指数としては1年31、2年41、3年35、附属中26となっており、附属の指数が低い。附属所属の先生による改善のための論議が必要。</p> <p>(5) 高校の保護者の77%は肯定している。附属の保護者は56%にとどまり、28%の否定的な回答が見られた。</p> <p>(6) 肯定的意見に回答してくれた保護者は58指数となっている。</p> <p>(6) 保護者からのアンケート分析では肯定意見が67となっている。</p> <p>(7) 講習については、次年度の学年につなげていく意味から来年度は3学期3月に設定(今までは7月)し次年度の学習につなげていきたい。生徒からは-8と言う厳しい結果が出ている。講習の在り方を改革するために「駿台サテネット21」の導入も考える。</p> <p>(7) 保護者アンケートを分析すると61指数となっている。附属中は70となっている。</p> <p>(8) 電子黒板とタブレットを融合させた活用には担当の先生により温度差があり、今後の課題となっている。しかし、今年度佐賀大学でタブレットを利用した入試が導入されていることを考えると対応を急ぐ必要がある。</p> <p>(9) 英検準2級以上の合格者は69と中々目的達成まで道のりはある。しかし、実力があっても受験をしない生徒が多く、その原因はクラブ活動にあるとも考えられ両立の難しさがある。附属中では準1級合格者が出るなど順調に英検合格者が増加している。</p> <p>(11) 本校の教育の柱となる「自学自習」を進めるためのスタディサプリのログイン数は98.15%となっており当初の目標は達成されている。</p> <p>(12) 管理自習室の利用が定期テスト前を除き低調となっている。次年度に向けてよりりよえしやすいうように部屋の拡大を図りたい。</p> <p>(13) 現在、高校では、大阪教育大学の教授を今年度も招き研修会へ行っている途上にある。1年留学についてはカナダとともにこの春からニュージーランド留学を現地学校と直接交渉して進めている。さらに、自然とに向けて国際教育をより充実するために「普通科」と「国際科」の二つを設置することも検討に入っている。</p> <p>(13) 附属中学校では二人のネイティブを中心に「英語4技能」の充実が進んでる。</p> <p>準1級合格者3、2級合格者13、準2級22名となっている。</p>
<p>3 社会性の育成</p> <p>(1) 助け合う雰囲気あふれるクラスづくり</p> <p>(2) 部活動の活性化</p>	<p>学校教育の目的は、教科指導による学力の向上とともに多様な体験活動を通して集団の中で協調性や耐性、社会性を育てることも大切な使命である。本校が「両立」を合言葉にすべてのコースで部活動を可</p>	<p>(1)①「クラス全体の結束力が強く行事の中で達成感や一体感があると感じることが多い」②「困っているクラスメートがいれば誰に対しても手助けをす</p>	<p>①1年35、2年30、3年43、附属中28指数という結果が出た。指数としては悪くはないがまだまだ向上する余地は残されている。学年が上がるごとに高い指数となっていることが分かる。</p> <p>②1年41、2年35、3年36指数、附属中42となっている。昨年に続き3年の落ち込みが分かった。い</p>

	<p>(3)ボランティア活動の充実</p> <p>(4)学校行事の充実</p>	<p>能としている理由もここにある。</p> <p>(1)クラス経営力を向上させるため学年会での相互点検・改善を進める。</p> <p>(2)クラブ活動の成績と普段の学校生活は密接に関係することを指導しクラブと学習の両立を図る。</p> <p>(3)ボランティア活動の充実 地域清掃が集う、大阪マラソンボランティア活動への参加、セッション大阪とのサポーターティングマッチへの参加を進める。</p> <p>(4)生徒の自主性を育てる学校行事を促進する。</p>	<p>る生徒が多い」という指数を60以上とする。</p> <p>(2)「クラブ活動についても明確な目標があり、その実現に向けて前向きに取り組むことができている」という数値を60以上とする。</p> <p>(3)「学校はいろんなことを体験させてくれる」「体育大会や文化祭も楽しい」という指数を60以上とする。</p>	<p>ずれもB評価止まりになっている点を考えると生徒たちへの心の教育の必要性を感じる。しかし、個々の生徒は親切心があるが、集団となるとなかなか手助けしにくいという面もあるのでこれをもって道徳心がないとは言えない。</p> <p>(2)1年38(57)、2年36(56)、3年64(64)と言うように1・2年は昨年度より落ち込みが多い。</p> <p>(3)生徒も保護者も60を超える指数を出している。年々、子どもたちの質は良くなり、何事にも熱心に取り組む生徒が着実に増えてきている。ただ、生徒数に比較して学校施設が手狭なために十分な活動ができない面も否めない。大きな施設の必要でないクラブ活動を工夫して増やすことも考える必要がある。</p>
<p>3 信頼される学校づくり</p>	<p>3 保護者との信頼関係の醸成</p> <p>(1)保護者と信頼関係の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ホームページの充実 ○ 学芸新聞の発行 ○ 進路だよりの発行 <p>(2)進路情報の発信</p> <p>(3)防災教育への取り組み</p>	<p>附属中学校の保護者は地元の公立中学校に通学させないで遠い私立に子どもを通わせていることを考えると保護者との連携は高校以上に密にしなければならない。家庭訪問に変わる「保護者集会」「学級懇談会」「授業参観」等を計画的に実施し、「わが子の様子が見える」学校にする。</p> <p>高校も公立小中学校のように地域を校区として持たないために保護者への情報発信(学校生活充実度と進路情報の発信度)が信頼関係を築いていく上で大切な要素となっている。また、防災訓練等の安全生活に対する取組も緊急の課題であるという認識している。</p> <p>(1)担任のきめ細かな対応 体罰・暴言のないクラス・クラブ経営と教科指導を確立するための職員会議等を通じた啓発活動を進める。</p> <p>(2)ホームページの充実 ニュース、トピックスにて更新内容を周知する。</p> <p>(3)授業参観や進路・生活指導についての保護者集会を充実 教員と保護者の距離感を縮め話しやすい環境づくりを行う。</p> <p>(5) 学芸新聞の発行</p> <p>(4) 防災教育の充実 避難訓練(火災時と地震時に分けて)の実施と防災備品の整備を行う。</p> <p>また、附属中学生は電車等で通学している生徒も多く、災害発生時に帰宅困難となることも想定し防災グッズを常備する。</p>	<p>(1)授業参観や懇談会は適切な頻度で行われていて学校の様子をうかがい知る機械として機能している」という保護者アンケートの肯定意見を60以上とする。</p> <p>(2)「入学前と入学後の学校のイメージは子どもに聞くと良くなった。この学校に入学させて良かった」という数値を40以上とします。</p> <p>(3)「知人や将来は子どもに本校を紹介してもよい」という数値を50以上とします。</p> <p>(4)担任は「生徒に対する言葉遣いや態度は丁寧で適切であると感じることが多いし、保護者からも誠実に対応してくれる」という肯定回答を80%以上とする</p> <p>(5)「学校は一人ひとりの生徒を大切にしてくれる」という数値を45以上とする。</p> <p>(6)学校からの情報発信源となるホームページの閲覧数を22,000/月以上、直帰率を17%以下とする。</p> <p>(7)進路部長からの保護者対象の進路講話の充実。</p> <p>(8)大和川決壊や地震等災害による帰宅困難者対応を引き続き行う。</p>	<p>(1)高校では74%、附属中では69%の肯定意見があった。しかし、高校で18、附属で17の否定的意見もあった。今後の改善点として取組を進めたい。</p> <p>(2)全体では高校で74%、附属に科で77%の保護者が肯定回答をしている。「入学前よりもイメージが良くなった」という指数が1年63、2年44、3年50、附属中24となっている。指数であるためB評価となっている。</p> <p>(3)全体の80%近い保護者が肯定的な回答を出してくれた。生徒たちのアンケートでも1年74、2年60、3年67、附属中73となっている。ただ、附属については昨年度78の数値が今年は56となっていることが改善の余地のあることを示している。</p> <p>(4)全体では高校で84、附属中では90%の保護者から肯定的回答があった。 しかし高校で8%、附属中で9%の否定回答もあった。特に電話対応のきめ細かさが大切であり、家庭訪問のない私立学校では4月当初、懇談までに各家庭に担任から挨拶の電話を入れるように取り組みをさらに進めたい。</p> <p>(5)全体として44指数となった。附属中は52と高い評価となっている。本校の特色は丁寧できめ細やかな対応にあると考えている。今後もこの方針を曲げないように教職員に啓発を続けて行くことが大切である。</p> <p>(6)学校のホームページが充実していると考えている保護者は高校では70、附属中では79と高い評価となっている。ホームページの閲覧者数の月平均が30,133回となり目標を大きく上回った。 情報提供については68%の保護者から肯定回答をいただいたが、5%の保護者(72/名)からは否定回答となった。</p> <p>(7)進路部長による講話や進路だよりを通して保護者への啓発が十分にできた。また、予備校等の関係者からの大学入試の現状についての説明会も定着してきている。</p> <p>(8)昨年度に続き災害避難物資もすべての生徒に配布し教室保管することができている。教室に配置された備蓄物資にいたずらをする生徒もなく卒業まで保管されている。この物資を使わなくても良い日々が続くことを祈りつつ。</p>
<p>特記事項</p>	<p>1 1年生全員にタブレットを持たせることにより授業改善を図ってきた。</p> <p>2 1年留学先の創設。カナダのオタワ以外にニュージーランド・ネルソンのワイミヤ高校への留学制度を創った。</p> <p>3 学校危機管理マニュアルを作成して生徒の安全生活に対する教職員の意識の向上を図った。</p>			